

開催地名：石川県能美市	
開催日時	令和3年10月24日（日） 10:30～12:00
開催場所	能美市防災センター
語り部	糸日谷美奈子（千葉県千葉市）
参加者	約100名
開催経緯	<p>あらゆる生活シーンに防災があるという考えで、世代、ジャンル幅広く様々な分野の切り口から各種防災啓発を試みているところですが、過去、災害発生する頻度が少ない又は県民性からの起因か、行政に安全を委ねることによる安心感の確保により、「正常化偏見」といった心理的バイアスが生じてしまい、防災意識の醸成に繋がっていない場面が見受けられる状況となっています。災害伝承をいただくことにより、災害時のリアリティな想像を巡らし、現在の地域の姿(リスク)や生活行動と比較しながら、地域や家庭での防災のあり方を考える好機となり、災害を自分事としてとらえ、自他への知恵袋として発展していき、大きな効果が期待できるものと考えます。</p>
内容	<p>(1) 釜石東中学校での取組</p> <p>私は岩手県の中学校で理科教諭として10年間勤務していた中で、東日本大震災を経験した。今までも釜石市は津波の被害を何度も経験してきた地域であるため、小・中学校では、総合学習の時間を利用して防災に関する様々な取り組みを行っていた。私が勤めていた釜石東中学校では、小・中学校合同の避難訓練の他、救助訓練や炊き出し体験などを、地域の方々を講師として定期的実施していた。この取り組みのおかげで、児童・生徒たちは、大地震と津波から守られたといえる。</p> <p>(2) 東日本大震災の当日</p> <p>平成23年3月11日の14時45分、三陸沖を震源として発生した地震が釜石東中学校を襲った。学校では、ホームルームを終えて部活動の準備をしている時間帯だったので、皆バラバラの場所にいた。このため点呼も取れないまま、各自の判断で第一避難所に向かって走った。学校から約800m離れた第一避難所には、隣の小学校と合わせて1000人ほど避難してきていたが、さらに400m高台の第二避難所に避難した。第二避難所が最終避難場所に設定されていたので安心して時計を見ると15時15分、地震から約30分経っていたが余震は続いていた。その場から町の様子は見えず、海側から低い地鳴のような音と砂煙のようなものが近づいてくるのが見えた</p>

	<p>が、すぐに何なのか分からなかった。近くの先生が「逃げろ。死ぬぞ。」と叫んでようやく、砂煙のようなものが津波の水しぶきであることに気づいた。私たちはさらに高台に避難するために第二避難所の敷地外に出ると、道路の下のほうから黒い津波が迫っているのが見えた。国道の下は水に飲まれ、雪も降っていたので、この場に留まるわけにはいかなかったが、訓練の想定を超えた状況に話し合いは時間を要し、辺りは薄暗くなっていった。国道を通ることはできなくなっていたので、一週間前に開通したばかりの高速道路を歩いて釜石市内に向かうことにした。釜石市役所についた頃には真っ暗になっていた。脇の廃校となっていた中学校の体育館で約2,000人が、3月11日の夜を過ごした。</p> <p>(3) 避難生活まとめ</p> <p>震災2日目、内陸の中学校へ避難場所を移し、地域から布団や食料の支援をいただくとともに、自衛隊の発電機による電力の供給や炊き出し、道路の復旧、ラジオによる情報発信等で徐々に避難生活が改善されていった。班を作り係分担したこともいい結果につながったと思う。</p> <p>釜石市では、近い将来、7割以上の確率で大規模な地震が発生することを誰もが認識していたにも拘わらず、当時の人口3万人のうち、888人の方が亡くなり、154人の方が行方不明となった。しかし、震災時学校にいた小学生中学生については全員が無事だった。これは「釜石の奇跡」としてメディアで報道されたが、子どもたちは、地震があったら津波が来ること、津波は学校の3階まで30分で到達すること、走って逃げても追いつかれることを誰もが認識しており、だからこそ、指示を待つことなく、みんな走って逃げたのだ。</p> <div data-bbox="512 1473 927 1787" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="954 1473 1361 1787" data-label="Image"> </div>
開催地より	<p>災害が起きた時間に地域にいるのは誰か。時間に応じてその場にいる人々が動けることが重要であることを痛感した。また自分が地域にいるときに災害が起きたら何ができるのか、ということを考えさせられた。</p>